

平成29年度第2回丹波市総合教育会議 会議録

平成29年10月23日（月）午後3時～

丹波市教育委員会

出席者	市長	谷口 進一
	副市長	鬼頭 哲也
	教育長	岸田 隆博
	教育長職務代理者	深田 俊郎
	教育委員	荻野 確郎
	教育委員	中村 美穂
	教育委員	上田 真弓
	企画総務部長	村上 佳邦
	総務課長	柿原 孝康
	教育部長	細見 正敏
	教育部次長兼学校教育課長	西田 隆之
	教育総務課長	岡本 晃三
	学事課長	前川 孝之
	こども園推進課長	上田 貴子
	子育て支援課長	足立 勲
	文化財課長兼美術館副館長	
	兼中央図書館副館長	谷口 正一
	教育総務課副課長兼庶務係長	荻野 昭久

○村上部長 定刻前ではございますけれども、お揃いでございますので、それでは、第2回目の丹波市総合教育会議のほうを始めさせていただきたいと思っております。

それでは、本日の次第につきましては、お手元にお配りしておりますとおりでございます。これに従いまして、進めさせていただきたいと思っております。

最初に、お断りを申し上げておきます。本日、市長も後の公務がございまして、4時半には終了したいということでございますので、あらかじめ御承知おきいただきたいと思います。

それでは、早速ではございますけれども、次第の2番目、丹波市の教育についてということで、市長よりお話をさせていただきます。

それでは、市長、よろしく願いいたします。

○谷口市長 皆さん、こんにちは。

私、就任しましてから、2回目のこの総合教育会議ということでございます。

前回、5月17日でしたけども、私の丹波市政にかける思いみたいなものをお話をさせてもらいました。

それもあれから大体また5カ月、6カ月ぐらいになりまして、自分で言うのもなんですけど、少しずつ進化をいたしております。その内容を、少し御報告をさせていただきたいのと、直近の大きな課題、今、新庁舎の話を進めようとしておりますが、その話を少しと、それからこの前10月12日に、丹波市の教職員組合の方々と話し合いの場がありました。その中で思ったことを少し話をさせてもらいまして、話題提供というようなことにさせてもらいたいと思っております。

また、この中でも岸田教育長がずっとブログで、ブログというのか、自分のホームページみたいなところに書いてはりますよね。私もずっと読んで、なかなか一本筋の通った、本当に人一倍強い思いが出て、いいなと思いつつながら、ずっと読んでいます。そういったことも、少しこの中には資料として、抜き出してあります。とにかく、これから学習指導要領が大きく変わっていく、そんな大きな変革の時代にあって、とにかくこの舵取りをしていただくのに、大変にふさわしい人だと思っております。

来年度の30年度予算というのは、岸田教育長が就任されて初めての予算ということになりますので、ここでいろんな話が出るとしましたら、その中で、ぜひとも何かこう新年度予算に、丹波市の教育の大きな方針として盛り込みたい、そういうものの何かヒントになれば大変にありがたいなと思っております。

私の配りました資料を少し見ていただけますか。時間は、10分と今なっております。ちょっと延びるかもしれません。

丹波市4年間のロードマップという、こんな黄色、これ前配りませんでしたよね、これはね。結局、私も一般市民の人対象に、こんなことしたいんだということを出していかとあかんという意味では、できる限りわかりやすい資料にしようと心がけています。ですから、88歳の母親、デイサービス行ってますけど、「おばあちゃん、これわかるか？」と聞いてみて、それと中学3年生ぐらいの子も、「これ見て大体わかる？」と確認をとった上で出させてもらいたい。もう、1割ほどの人しかわからないというのはあんまりかなということで、写真を入れたり、何か入れたりしながら市政報告みたいなものをつくっております。

いろんな場をかりて、こういったもの、しつこく配っておりますと、あんた、それもう、わし3枚も持っとなでという人もあつたりしますが、自分がしたいと思うこと、やりたいと思うことはしつこく言うこと、これがひとつ基本だと思っております。

この黄色い紙は、ここから10年、丹波市を変えたいと言ったけども、私に与えられているのは、2020年の12月4日までが私の任期ですので、4年の中で何ができるということで、2017、18、19、20とこんなことをしたいということで、それを下のほうに書きました、シティプロモーションという格好で進めたいということでございます。この裏側をざっと見ていただきますと、今、可能な限りいろんなところと手を結ぼう、連携をしていこうということを心がけております。

これ、前も言ったかもしれませんが、これから、どんどん人口が減っていきますね。これ、にぎわいを維持していくためには、自治体同士で定住人口の取り合い、人の取り合いをしとっても仕方がないので、お互いに交流をし

ていきましょうよと。いろんなどころ、友達が今まで10人やったところが20人30人にふやしていけば、人口が減っても、にぎわいは落ちません。そんなイメージで、上のほうに表をつくっておりますけど。

つい先日は、下から2つ目の武庫川女子大学、ここと包括連携協定、これを結んで参りました。皆さん、教育関係の方は御存知だと思いますが、この初代の公江喜市郎さんという方は、青垣町の栗住野の出身で、いわゆる向こうでは校祖と言ってます。校祖公江喜市郎と、大きな銅像建ってます。あそこ、学生さんが今1万人で、日本で一番大きい女子大学らしいです。そういう学校と、もともと御縁があるわけで、連携協定を結びました。

じゃあ、何をやるんかということですけど、これから研究活動、いろいろゼミの活動とかされる際に、ぜひとも丹波市を1つのフィールドにして、いろいろ研究活動してください。で、もし、あわよくば、その先に丹波市で働いていただくとか、あるいは武庫川女子大学のランチができるとか、そんなことになったら、大きな喜びやな、そんなところがございます。積極的に、向こうもすごく対応してもらいまして、食とか農業ということについては、丹波市は、やっぱりよそよりも少し抜きん出ている。だから、そういう点で、学生が勉強する、そんなフィールドになるのではないかということなどもいろいろ話が出まして、これからの楽しみがあります。

それと、その次の横長のこのシートをちょっと見ていただきますと、丹波市忠臣蔵ロードマップと書きました。先ほど、2019年にこんなことやりたいということ、もう少し詳細に紙に落とすと、こんなことになるかなということがございます。左側に統合新病院を1番にして13番まで、ずらっと事業を並べてます。

こういったような、一種公約に掲げたような事業、これをどんなスケジュールでやっていくんかということです。この星マークがついてるのが、オープンとか完成の時期を示しています。ですから、ほとんどが2019年度、東京オリンピックの前の年ですね。

結局、この年の4月には改元すると、この前新聞にも出ましたですけど、大きな時代の変わり目、丹波市にとっても、合併して15年の節目です。

私の仕事は、そもそも多くの市民の方々に夢と希望を与える、それが私の

仕事やと思っています。

前の辻市長からは引き継ぎのときに、単にパフォーマンスするだけの市長はあかんと、こういうふうにくぎを刺されました。そうではなくて、一応提案したら提案したで、きちんとやり切るんやと、それもスケジュールを決めてですね。そういう意味では、650人の丹波市役所の職員、あるいは6万5,000人の丹波市民の方々との間の契約書と言うてええのか、協定書と言うてええのか、赤穂浪士で言うところの血判状、そんなもんやと私は理解してるんですけど。この期限で必ずやり切ろうと、こういうシートになっています。

一番上に忠臣蔵と書きましたのは、先ほど言いましたとおり、元禄15年12月14日と日を決めて、きっぱり本懐を遂げたわけです。吉良上野介の首を取った。それと一緒に、期限をきちっと決めて、そのときまでにやり切る。一種のジョークですけども、そういう気持ちが込められていると理解をいただけたら大変ありがたいと思っています。

一番右端に、○×と書いてるのは進行管理で、2年後まで持つといってもらって、すぐにぽいと捨てないで、どこか家の中に貼っておいてもらって、これはできたな、○、これはできてへんな、×、このように御利用していただいたら大変ありがたいなと思っています。

この中には、例えば6番、7番、青垣の小学校が3つなくなりましたけど、これを何とか、そのまま利用価値がないもんだということで潰して撤去してしまうと、そんなんではなくて、何とか地域のともしびですから。活用できるようにしたいということで、これもこの公約の中に入れております。

次のシートですけども、次の紙は、教育長室からということで、岸田教育長がいろいろ書いておられる中で、なかなかこの言葉おもしろいな、どっかで使えるなと思ったようなことを私なりにメモで書いたもの、書いたものをあえてここに付けさせてもらったということでございます。

一番上、子供は好きな人からしか学ばない。確かにほんまそうですわね。これ、教師と子供の関係ではなくて、本当にどの関係でも言えるなと。私、ふだん仕事していく上でも、この人が好きやと思わなかったら、その人の言うことを聞こうとか、この人についていこうとか、一緒に仕事しようとか思

いませんわね。せやから、これはどこにでも通用する、ええ言葉やなど、今さらながらに、自分で書きながら、ちょっと心にとめたということでございます。

それと、その次、「慎独のすすめ」と書きましたが、皆さんあんまり、慎独って聞かれたことないと思います。今、御手元に広報たんば、委員の方々にはお渡ししましたけど、広報たんばに付箋をつけましたが、ここのページを開いていただきますと、実はこれきのう、一昨日、出たばかりの広報です。

私、但馬に勤務にしていますときに、なるほどなと思って感心したんですけど、こういう考え方って、今、学校現場で通じるのかどうか、あるいは、こんなことをわざわざ言うべきかどうか、そういうことも後で御意見としてほしいなと思いました。

これは、一番上に書いてますとおり、先生、あしたから僕は慎独しますと言って、養父市の宿南小学校の子供が長い夏休みに入ったということです。結局、ふだんは、先生から、がみがみ言われて宿題出されて勉強するんだけど、あしたから全くフリーになる。フリーになるけど、誰にも監視されないけども、自分は自分の行動を律して、それで長い夏休みを過ごしますと、こういうふうに言ったということです。

結局、それはここに書いてますが、池田草庵という人が幕末に立派な塾を持ってまして、全国から600人、700人ぐらいの塾生が来て、東大の総長が出たし、国立銀行の何か頭取みたいな人が出ましたし、学者も大勢出た、文部大臣も出た。びっくりするぐらいたくさんの人が出てるんです。何でそんなところで出たんか、何を教えたんか。結局ね、物理や数学や、あるいは経済理論を教えたわけでも何でもなし。ここにも書いてますけど、自分の生き方、必ず言うだけではなくて、実践をせなあかんとか、そういうふうな論語に書いてあるようなこととか、陽明学とか、そんなことを教えた。それを慎独と、こういうふうに言ってるんですけどね。

そこで、養父市では、毎月1回は草庵の日と決めて、その日は絶対にゲームをやめようなど、ゲームはしない。とにかく、どこでもそうですけど、ゲームに費やす時間がめっちゃやたらと長いですよ。それを何とか改善をしようという意味で、そんな日を設けたということです。

一番下に3行ほど書きましたけど、基本的に、志さえきちんと植えつけることができれば、子供や若者は、自分で勝手に歩き出すんやろうなど。そういうことではないかというヒントになったということです。

実は、あと2枚ぐらいめくっていただきますと、読書のすすめという、ある本読んでましたら、こんなページが出てきたので、こういうことやなと思って、たまたまコピーしてつけたのですが、この前、教職員組合との話し合いの中で、学校司書を配置してくれと、こんな話がありました。とにかく、今の子供さんは余り本を読みません。今、兵庫県の中でも学校司書を置いている率というのは3割に満たないとか。丹波市は、今、置いてないんですけど、それを置くべきではないかという意見でした。私は、それはなるほど、それは必要やなど、ただ、司書を置いたら解決する問題やったらそれでいいんですけど。

私も大事に持っている本を、急にこれ持ってきたんですけど。これ、昭和37年の本で、当時は何でか知らんけど、本なんて私らの近くにはなかったです。当時の柏原やその周辺でもね。本買うことなんてなくて、おばさんがこれ読めと言うて都会から送ってくれた本です。偉人伝が多かったです。これは、たまたまレントゲンという本です。37年やから、私が9歳やから小学校3年生ぐらいかな、3年生か4年生ぐらいだったと思いますけど。これ見たら、これ何や、ずっとぼろぼろになるまで読んでましたわ、同じ本をね。

というふうに、もう少し子供さんに、本に親しむ機会、そういうことを持たせるとするのは本当に必要やなど。学校図書云々とは別にして、そんなことをちょっと思ったもので、そういうことも1つの話題になるかなと。

あるいは、先ほどの慎独とかいう、一種、道徳的な考え方。今度、学習指導要領なんかには、その道徳なんかも位置づけが変わるようですよ。

そういうことも含めて、片やICTとか英語とか、その上に、さらに道徳とかですね、そういうことってどうなのかというようなことについても、少し認識が深まったら、私なりに、うれしいなと思います。

それと最近の話題ということで、新庁舎整備構想の考え方と、このように、こんな資料をつけております。これは、先日、市議会にも配った資料です。マスコミにも配っております。というのは、御案内のとおり、この山南庁舎

もそうですけども、普通は、市役所の庁舎というと、どこか1カ所に、教育委員会も全部入っているのが普通ですよ。いろんな重要なことが、話が連携できるように。

それが合併して13年になるんですけども、それが十分ではない。春日庁舎、山南庁舎、このように分かれてますよね。ですから、ほとんど何かなかったら顔を合わすこともないし、話をするということもない。これではちょっとどうかという気が、私も就任して10カ月たつと大変に思いが強くなってきたもので。辻市長からは、大変に難しい問題やから、あんまり急がないで慎重にやれよと、このようには言われてたんですが、早く取り組まないで、それだけおくと、オープンがずっと先になっていきますので。できれば、今から前向きに取り組みたいということで、市議会には今、話ししたところです。新聞でも見ていただいたかもしれません。

そういうことで、教育委員会もどっか1カ所、場所の問題は大変難しいんですよ、どんな場所にしていくかというのはね。場所を決める前に、例えば3ページを見ていただくと、丹波市の姿全体を俯瞰したら、まあ言ったら大きなグローブをがっとうらげたような、こんな形になってますよね。それぞれ谷谷で、谷筋ごとに青垣や市島や何やと分かれている。そういう意味からは、新しい庁舎をつくる場所、それは、市島とか青垣とかには多分ならんですよ。

中心部の、これで言うと氷上インターと柏原、これが広域拠点と位置づけてあって、それに加えて、副拠点として春日。氷上、柏原、春日、このあたりに、どっかに場所を求めるとするのが1番妥当な意見ではないかと思うんです。これをできる限り早いうちに、できたら、2018年中あるいは来年度中、それには決めたい、そのように思っています。

7ページを見ていただくと、庁舎建設までのスケジュールと、このように書いてますね。この中では、一番最速で取り組んでも、オープンが平成36年。今から7年後、そんな長期の大仕事になるかなと思うんですけども、こういうことに今から取り組んでいきたいなと思っていますところなんです。

とりあえず、ちょっと大ざっぱになりましたけど、私のほうから、当面、今、取り組みたいと思っているようなこととお話しさせていただきました。



また、後で、いろいろと議論ができればと思います。

私からは、以上です。

○村上部長 ありがとうございます。

今、市長が申しあげましたように、後ほど意見交換の中等で御質問があればお伺いしたいと思います。

それでは、次に、各教育委員より、お話をいただきたいと思います。

まず最初に、深田教育長職務代理者のほうからお願いをいたします。

○深田教育長職務代理 きょうは、市長さんとの懇談ということで、丹波の教育について、どう思ってるんのかということをもとめてこいということで、委員4人、多分考えてきておりますが、今お話あったようなことも含めて、それぞれが話しすると思いますので、その中をまた、斟酌いただいて、何か現実のものにしていただく、そんなことがあれば、ありがたいなと思ってます。

私のほうから、まず申し上げますが、まず、丹波の子供たちのことを、私たち、いつも、こうやって教育委員会の中で考えておるわけですが、丹波の子供たちは、前の総合会議でも申しあげたかと思いますが、本当に素直で、良い子が育っているなという思いはいたします。その背景としましては、例えば、3世代とか言いますが、やはり子供たちの力というのは、いろんな人間、いろんな人たちと話しする、対面する、その中から力がどんどんついてくるんだと思っています。

都会のように、例えば、少子化の中で、最低、お父さん、お母さん、自分という3人のつき合いの中で育っていくのとは違いまして、たくさんの人に囲まれて、本当に温かく育っているなど。

ところが、昨今言われるのは、丹波の子供たち、元気がないやないかと、力がないやないかと言われます。何かやっぱり不足しているところがあるんだなと思います。

市長のほうは市長のほうで、いろいろと今もお話しいただきましたように考えていらっしゃると思いますが、これは個人的な思いとしてお聞きいただけるとは思いますが、一方で、やっぱりこの丹波で、その子供たちの力をつけるためにどうしたらええんかなということを常々考えている、個人的な思い

として聞いていただいたらと思いますけども。

やはり幼児、それから小学生、このあたりである程度の力をつけなければ、次につながっていかないんじゃないかなという思いはします。そうしますと、その力をつけるために、その時点で、何が欠けてるのかなということを思いますと、やはりその幼児小学生の親御さんたち、先ほど教育長の部屋からというこの文言が市長のほうからもまとめていただいているわけですが、この親御さんたちが、しっかりこれをしていただいたら、この子供たちは、もっともっとよくなっていくんじゃないかなと、そういう思いがします。

誰がこれを仕掛けていくのか、そこのところは、これからいろんな負担がないように考えなきゃいけないんですが、教育長の部屋からというこのことをおっしゃったように、親御さんたちが、それぞれの家庭が守ってやっていただいたら、本当に力がつくんじゃないかなという思いがしています。

特に父親、このあたりを、お母さん方は、いつも学校でも幼稚園でもいろんな会合でも出て来られるんですが、父親の姿が見えないというのがずっと言われているところです。この父親の指導力をつけていったら、子供たちというのは、もっともっとよくなるんじゃないかなと思います。

じゃあ、それを学校のほうでやってもらう、父親を集めていろんなことをやってもらう。そのまた、学校のほうも大変になってきますので、いつも言って、一笑に伏されるんですけども、やっぱり自治会とか自治振興会とか、随分、市のほうでもいろいろ事業を委ねておりますが、その地域の若者、幼稚園、あるいは小学生を持っている若者、親、父親、これを何とか自治会や振興会が力をつけて育てられないかなと、そんな思いが、まずしています。

その中から、先ほどおっしゃっていただいたような、読書に対する力、あるいは、物事を考える力、あるいは、慎独からつながっていくのは慎み深い力、そのものができてんじゃないかなと1点思っておるところです。大ざっぱな思いです。

あと、具体的に市長から提案していただいた中で2つほど。

まず、校舎の活用ということで廃校のことが書いてございました。いろいろとシティプロモーションの中から入ってこられた企業等々もあるようですが、まだ何かあいている学校も施設もあると聞いております。

ここを、この教育委員会の立場からして、例えば、今、いろんな各地で、きょうも議論の中でやっと思ったんですが、イングリッシュキャンプという、これは先生だけ集めたのを教育委員会でやっておられるようですが、ほかの地域では、子供たちを集めてイングリッシュキャンプをやっていく。小学生、中学生を集めてやってる。ただ、その施設がどうなのかというところです。

イングリッシュキャンプも、例えば1週間続ければ、寝泊りして1週間続ければ随分伸びるとも聞いております。例えば、そういう研修施設、教員も子供たちも、あるいは丹波市の職員も、あるいは先ほど言いました自治会の職員、あるいは振興会の人たち等々が、何か寝泊りして、宿泊しながら、1週間とは言いませんが、1日でも2日でも、何かこう研修をしていけるような施設にならないかな。ただ、青垣の施設を活用するとなれば、地理的に遠いわけで、いろいろなことが出てくるかもしれませんが、そんなことが考えられないかなということがあります。

2つ目が新庁舎の件ですが、新庁舎、どこになるかわかりませんが、今お聞きすると、氷上、柏原を主軸として、春日の副軸というお話ですが、もし新庁舎が建設される折には、やっぱり、丹波市ならでは、日本でもここだけという、そういった周辺整備をお願いしたいなど。

具体的に言いますと、例えば新庁舎のそばに図書館があり、新庁舎のそばにアリーナがあり、あるいは、新庁舎のそばにお年寄りが集まれるような施設があり、子供から大人まで、市役所を中心にして集まれるような、そんな複合施設を考えていただければありがたいなと思ってます。随分お金かかると思いますが。

最後ですが、ちょっと1つだけ、具体的なことを子供たちの力を伸ばすためにお聞きいただければと思います。

大学入試が、2020年度から新しい大学入試に変わっていくというのは、皆さん御存じのところかと思えます。要するに記述式の答えが多くなるわけですが、その中で、大きな変化があるのは、英語が大きな変化が出てくると思います。これは、今までのマークシートは、もちろん残ると思いますが、それにプラス、記述式のそういう英語の問題が出てきます。

それに、民間の事業者が入ってくる。例えば、英検であったり、あるいは

TOEICであったりTOEFLであったり、あるいは、最近、進研模試なんかはGTECというのをつくっています。高校なんかはそれを早く対応しながら、今も多分取り組んでおると思います。それを今の中3の子たちが受けるわけです。

各地では、小学校から英語も、これから新学習要領では出てきます。何とかこの英語を軸にして、丹波の子は、弱い弱いと言われておるんですけども、英語を軸にして、幼い子から小学校、中学校、高校とつなげていけないかな。業者の問題をやる。今言ったような民間業者も、中学も高校もできるというようなことも聞いております。中学の子供たち、無償化というのはちょっとしんどいと思いますけども、半分負担しながら、そういうふうな訓練を受けさせながら、そして、力を伸ばしていく。小学校、中学校、高校の先生方は、それを分析して、また、新しい力にしていく。そういうことはできないかなと、そんなこともちらっと考えているところです。

ちょっと5分長くなりましたが、そんな4点、申し上げて終わりたいと思います。

よろしく願いいたします。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、荻野委員、よろしく願いいたします。

○荻野教育委員 荻野確郎といいます。よろしく願いします。

私は、本当に、市長さんの、ほっと見ていただけるような話ができないなと思いながら、ちょっとまとめてきました。

今の教育の課題、教育行政の課題でもあると思いますが、学校運営協議会コミュニティ・スクールのことと、もう一つは、今、適正規模、適正配置の問題。それと、恐らく私が住んでいる地域の学校もそのうち統合されて、他の活用が必要になってくるであろうと思われまますので、校舎の活用について、お話をさせていただきたいと思います。

1点、まず、学校運営協議会、コミュニティ・スクールについては、私は、早く全学校が設置すべきであると思っています。丹波市で市民総がかりの教育をテーマにして取り組みがなされてきていますが、十分それが、実を結んでいるということは、なかなか言えないのではないかなと思うんです。

地域の住民の、各小学校なり中学校に対する期待は非常に大きなものがあります。子供たちが学校で学び、成長する姿を日々見るのが、私たちにとっては、やっぱり非常に大きな喜びでもあります。そして、その思いから、子供たちの成長発展に少しでも、私たちが役立てるならば、地域としても、善良なサポーターとして、何か力を尽くしたいなど、そういう思いを強く持っています。

教育行政は、やっぱり学校運営の意義を、積極的に地域、実施、公開等に発信をしていただいて、そういう圧力というような団体ではなくて、学校への積極的な協力団体としてかかわって、学校、地域、保護者が、本当に一致協力して、この人たちを育てていく体制を絶対にとる必要があると、そんなふうに思っております。そのときに、私は、その主体はやっぱり学校であると思います。

今回、この学校協議会、コミュニティ・スクール設置についての条例規則が丹波市でできました。その中で、文部科学省なんかの文献を読みますと、言われてることは、学校協議会を進めていく上で、学校の責任者というのはやっぱり校長であって、校長は、その権限と責任を持つということになります。ただし、今の条例規則では、校長はその委員会に必ずしも入らなくてもよい条文になっているように思います。これだけ学校運営に関して、その権限と責任を与えている校長が、学校の教育課程等の、オープンにするときに、それをできる責任者は、やっぱり校長であると、そんな意味からも、ぜひ校長が入って、学校運営協議会がスムーズに進行するような形をとってもらいたいなどというのが1点です。

もう一つ、学校の適正規模、適正配置についてですが、私の認識が間違っていたら訂正をいただきたいんですが、問題の発端は、適正規模という観点から、教育行政から発信されたものだろうと思うんです。そういう意味で言うと、地域とか地域住民に対して、そういう意味では、教育行政として、リーダーシップを発揮していただく責任があるのではないかと。

昨今の丹波市内の統合問題を見ていますと、例えば、こっちの南のほうの地域においては、統合は必要やという話になってるんだと思うんです。ただし、たまたま大人とか地域の、言葉ちょっと悪いですが、エゴなのか。

やっぱり、大人の不作為によって、なかなか進んでいないのではないかという感じを私は非常に受けています。

行政のそういう意味で言うと、リーダーシップを発揮される中で、早期に結論を出して、今、この地域で言うと、幼、保、小、中、非常に狭い範囲の中で、人間関係が固定化されてというような形になっていると思います。もっと、そういう状況を打破して、新たな人間関係とか出会いを確保していくことが、私は、子供の成長に大きくつながっていくのではないか。そういう意味で、行政並びに市の行政のリーダーシップが、今、必要なのではないかと思います。

もう一点、私の地域の状況からすると、統合という方向を出しながら、今年度、白紙になったように思います。いろんな友達がいて、いろいろ話をする中で、この昨年度末には、統合やむなしという話になっていたものが、ことし全ての委員が交代した中で、もう一遍見直してみようという話になったようです。

これまで議論を重ねてきて、やっぱり小学校の統合は必要ではないかという大方の意見。その中で、特に、意見で、統合は必要だと思っているのは、子供を持つ親が多いです、若い人たちがですね。ただ、年配の人たちの中には、やっぱり学校がなくなると、その地域は寂れてしまう。何か中心がなくなるという思いをもって、あるいは、コミュニティーが崩れてしまうということも言われたりもします。

そういう中で、子供たちが大勢の中で切磋琢磨し、いくことが、子供たちが育っていく上では必要ではないか。そういう意味からも、できるだけ十分な議論を早くして、それこそ市長も言われたように、期限をきちっと決めて、方向を私は出すべきではないかと思っております。

もう一点、最後、校舎の活用ですが、私の住んでいる地域も、もうすぐに、恐らく空き校舎になる可能性が多いです。そんな中で、私は、今、自然学校なり、そういうものをしてますが、自然体験の拠点にぜひしたいなと思っているので、もし活用可能ならですね。

私たちの地域も、非常に休耕地、不耕作地がかなり多くなってきてます。あえては、そういうふうなものを、有志を募れば結構できそうやなという話

をしてるんですが、自治振興会等の指導によって、スタッフをつくって、そして、農業体験みたいなものをできるような方法がないだろうか。現実には、実際に放棄地、耕作放棄地になってしまって、草が生えているような状況です。それで何とかしたいという人間はかなりたくさんいるので、そういう中に子供たちが来て、そういう体験をすると。宿泊場所みたいなものが、校舎の活用が、お金もかかるんだろうと思うんですが、そういうものに活用ができたなら、地域としては、いわゆるみんな大人がやりがいがあるような感じもするので。もうリタイヤしたものたちが、スクラムを組んで、そういう方向に行けたらいいなど、そんなことは地域の中で話をしたり、考えているところですよ。

以上、3点、参考になるような話じゃなかったかもしれませんが、思いをちょっと述べさせていただきました。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは、続いて中村委員、お願いいたします。

○中村教育委員 教育委員の中村美穂です。

私が教育について思うことですが、ちょっとイラストを持ってきたんですけど、こちらに見せてよろしいですか。生まれたときから、私は、ここになるんですけど。

私の子供は、この高校生2人と小学生1人になるんですけど、もうこの高校生と小学生は、スマホとかゲームをする習慣というのは、すぐにつくんですけど、読書をするっていう習慣は、私の、大人でもそうですけど、なかなか習慣がつきにくいということがあります。なので、小学校、中学校、高校と成長していく中で、小学校へ入学する前の幼児教育に力を入れて、あらゆる習慣をつけていくことが大切だと思っています。

子供は、やればやるほど、どんどん上達しますし、教科書を見て教えていくよりも体で教えていくという、覚えていくという力がすばらしくて、そこから自然と基礎ができる。この力をうまく引き出すことができれば、それぞれ表現する力というのが身につけてくるのではないかなと思っています。

英語や国語、算数、そしてふるさと教育なんかも、この時期に遊びから取り入れて、本を読む習慣もこの時期から何分間というふうに決めて、つけて

いけばいいんじゃないかなと思っています。読み聞かせも、とても大事なんですけども、文字が書けなくても、読めるようになると、自分で本を読むこともできますし、本なんかも、丹波市の建物とか、お花とか、そして私たちが食べたお菓子のごみはどうなっていくのかという、そんなことを絵本にして見せていくのも、とてもおもしろいのではないかなと思いました。そんな絵も中学生や高校生の美術部の皆さんにも協力してもらって、一緒に丹波市を知るといいう取り組みをしていっても、おもしろいんじゃないかなと思いました。

この時期に力を入れるとなると、今まで以上に、保育士さんの負担がかかってくるように思います。なので、英語の先生や地域の人に協力してもらうことが、とても大切だと思っています。英語の先生なんかも予算的に難しいようでしたら、英語が話せる保護者や英語を勉強中のおじいちゃん、おばあちゃんにも協力してもらって、ふだんの生活の中で、英語で話をするということが大事だと思っています。

小学校に入ると、どうしてもお勤めされる保護者もふえてきて、PTA活動の参加率も悪くなるんですけども、この時期の保護者というのは、本当に積極的に活動されたりしています。なので、そういった保護者の皆さんや健康課の皆さんともタックを組んだりして、心も体も自信を持って元気に過ごせる丹波人の基礎づくりをしていけたらいいなと考えています。

学習することは楽しいと感じられるような取り組みをしていけば、小学校に入っても、授業が楽しかったり、宿題をもっとやろうと、やりたいという気持ちにつながっていくのではないかなと思っています。

この時期に、またイラストですけど、情報を横に横に伸ばすことで、小・中・高といろんなことを積み上げて、それを上に積み上げていって、そして高い山ができる。このような高い山から、いろんな世界を見渡すことができる。そして、多くの人とも会うことができる。そして、この人はどこで育ったんや、丹波市。丹波市ってどんなところなんやというふうに、行ってみたいな、住んでみたいなど。こちらから行かなくても、人々が集まってくる、そんな取り組みができたらいいなと考えています。

小学校入学前に力を入れることで、将来、学習しやすい環境づくりがすぐ



にできると思っています。教育委員会やその他の部署とも連携をして、教育委員として取り組んでいきたいと考えています。

以上です。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは、最後になりますが、上田委員さん、よろしくお願いいたします。

○上田教育委員 教育委員の上田です。

私も市長や中村委員を見習って、見やすい資料と思って、パワーポイントを用意してたんですけど、ちょっと私の準備不足というか、直前になり過ぎて、資料としてお配りすることが、きょう、できないので、自分は見ながら、必要であれば、また資料もお渡しさせていただきたいなと思います。

私のほうから、まず、結論というか、具体的な提案とかやりたいこととして、できるだけ具体性を持たせたら、何かなというふうに考えたところからお話ししたいなと思います。

もう、教育長とか他の教育委員さんの話にも出てるんですけど、やはり、その学校と学校外をどうつなげるかとか、家庭をどう支援できるかってことは、誰が考えても大きなテーマで課題であり続けてると思ひまして、私もそのように思うんですが。

その具体的につなぎ合わせたり、ネットワークを稼働させるという仕掛けとして、私の提案としては、小中高校と地域をつなぐコーディネーター。コーディネーターといってもいろいろいますが、コーディネーターたり得る人の養成とか支援していくこと、それを実際に学校に配置したり、また、職として位置づけていくことというのが1つの私の提案です。また、それはどちらかというと大人側で、どう、その学校や子供の学びを支えるかという観点ですけれども、それ以外にも、子供、若者自身が主体的に動いていくこと、学びや活動を支援する仕組みもあつたらいいかなと思っています。

その理由というか、考え方の背景ですが、次の時期、学習指導要領で国が示していることとか、あと、恐らくこの後、教育長から御説明がある、これからの丹波の教育の方向性ということと重なってくるかなと思いますが、私自身が自分の体験から大事だなと思っていることは、やはり、そのいつか自立、世の中に出ていく一人一人として、やっぱり、子供が、もちろん発達段

階は追ってなんですけれども、社会がどういうふうに戻っているかとか、その中で自分がどう生かされているかを知っていくということ。その上で、子供たち一人一人が社会を形づくる担い手側として生きていけるということ。振り回されたり、流されたりするのではなくて、自分たち一人一人で、それぞれ力を合わせて社会をつくっていく、そういう人になっていくということが大事じゃないかなと思っています。それが町とか自治体の規模で見ると、そういう人材が育っていくことが、持続可能な社会とか地域づくりにもつながるかなと思います。

そのときに、学校という仕組みは、ある意味、できた設立の経緯からして、1回その社会とか地域から子供を引き離してという表現だとちょっとおかしいですけど、隔離して、効率的に学んでいける仕組みとして学校という制度ができています。

ただ、その学校という世界しかない、やはり、社会性を身につけていくという意味では、年齢とともに階段を上って行って、最後、社会人になっていくと思うんですけど、学校という仕組みの中でしか子供が生きられないと、やはり、その階段を上っていけない。違う年齢とか地域の大人とかかわることなく、最後、急に自立、断崖絶壁状態で、大人になったときに自立を迫られることになると思うので、その子供たちが階段を上って行く仕掛けが重要かなと思います。

そう思うときに、やはり学校という仕組みだけでは難しいので、どう学校と地域とか家庭というものをつないでいて、子供たちの学び全体をデザインできるかということが大事になるかなと思います。

文部科学省も今、その学校と地域が対等なパートナーとして手を結んで、子供たちの教育にかかわっていくべきということを掲げています。そのときに、1つポイントになってくるのが、さっき話にあったコミュニティ・スクール、学校運営協議会の仕組みもそうですけど、学校と地域それぞれをつなげるコーディネーターの役割を果たす人材が必要だと言われています。

さっきのが学校と地域で手をつなぐという図ですけど、それ以外にも文科省が示している図として、こういうネットワークで子供たちを育てていきたいと思いますということを書いて、これ、何がポイントかと言ったら、真ん中

は学校じゃないということです、子供で。学校は、もちろん、このネットワークの重要な1つですけれども、それぞれ、学校以外の主体も含めて、ネットワークとして機能することで、子供たちのそういうステップを助けていけるんじゃないかということが考えられているかなと思います。

今、いろんな、全国でも取り組み事例があるんですけれども、やはり、うまく学校と地域をつなぐということをしているコーディネーターさんを育てたり、配置したりすることが、実際のネットワークの稼働につながっている事例が多いかなと思います。

例えば、島根県の雲南市だと何種類かコーディネーターがいるんですけども、市の職員を各中学校に配置して、市の行政と学校のキャリア教育を中心につなぐというコーディネーターの役割を担わせているところもあったり。

あと、これは教育長もお詳しいかなと思うんですけど、隠岐島前、島ですけど、その3町では、いろんな高校のコーディネーター、高校でキャリア教育などを担うコーディネーターが複数人いたり、あるいは、公立塾とされるところで、学校外で子供たちの学びを支える人材がいたりということで、それぞれが1つの職として位置づけられていて、違う領域をつないで、子供たちの学びを支援していくという取り組みが行なわれていて、それも1つの例として、示唆があるかなと思います。

私が、今、丹波市の行政の状況を見ていて、課題に思っていることは、教育委員会で、以前は、社会教育生涯教育も直接見ていたと思うんですけど、今、市民活動課まちづくり部のほうに、生涯学習社会教育を補助執行させていて、そちらはそちらで、そのまちづくりとの連動ということで意義があると思うんですが、私がちょっと残念だなと思っているのは、その学校と地域社会をつなぐというところが抜け落ちてしまっているんじゃないかなと思います。

市民活動支援拠点をつくるという話も、今、あると思いますけれども、その構想を練る前身に当たる会議でしょうか、私も出させていただいてたんですけど、なかなかその中では、子供のことが出てこない。子育て支援という言葉は出てきますけど、学齢期とか、それ以上の子供と地域をつなぐ支援とかコーディネーターの話は出てこなくて、無意識に、その時期は学校にお任

せという状態になっているのかなと思います。なので、その生涯学習社会教育のほうで引き受けることになるかというのは、また論点だと思いますけど、その部分が抜け落ちると、やはり、学校は学校という孤立した状態が続いてしまうのかなと思います。

これも、社会教育生涯学習に係ることかなと思うんですけど、子供たちが学校外で、何か自分たちでイベントやりたいなとか、そういう動きを支援することも、予算的にも、今一部、生涯学習の中で、行政が意図してるというよりは勝手に出てきている部分もあると思うんですけど、やはりそこをもう少し重要視してもいいかなと思います。

大きな施策としては、ある町では、その若者の提案に何千万というようなものをつけてやる町、大胆な町もあるようですけど、そこまでいかなくても、小規模なものでも可能かなと思います。

最後に、自分たち自身のこと、これも議論が必要かなと思うんですけど、教育委員という位置づけが執行機関の委員ということで、普通の何とか会議の委員というよりも、ずっと重たい位置づけをいただいていると思ひまして。もっと、ただ実態を言うと、なかなかふだんの活動というのは、私自身の場合、特に、できていなくて、定例の教育委員会会議で意見を言うというところにとどまっているので、もう少し実働、教育委員が地域とか、あるいは、各テーマをそれぞれの委員が持って、実働のつなぎ目として、自分たち自身が、ある意味のコーディネーターができるような人材として働くこともあってもいいかなと思っています。

ちょっと済みません。やはり、資料との関係でうまく話できなかったんですけど、言いたかったことは、実働していくパートナーをふやしていくとかつないでいくということ。いないわけじゃなくて、学校から見ると、いないように見えるっていうことも多くあるので、そこをつなぐ人材が大事かなと思っております。

もう一つは、子供のことに戻ると、一人一人の学習権の保障というか、いわゆる多様性の担保にもなるかなと思うんですけど、かかわる大人がふえるということは、こぼれ落ちる子供たちが、なるべく少なくなるということでもあるかなと思うので、そういう意味でも学校と地域がつながって、いろん

な、教育長のページにも出てたかなと思いますけど、斜めの関係がもっと充実していくということを、理念だけではなくて、仕掛けとして実現させる必要があるかなと考えています。

以上です。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは、これからの教育の方向性についてということで、教育長よりお願いをいたします。

○岸田教育長 ちょっと時間が押してますので、十分な説明ができないかもしれませんが、私のほうは、この資料で説明させていただきます。

冒頭、市長のほうから、学習指導要領の話があったわけですが、今回、小学校については平成32年から、中学校は平成33年から、新しい学習指導要領の中で、学習を展開していくということになります。

今回、国のほうで、この学習指導要領がおおむね10年で改定されていくわけですが、今回の議論に当たっては、2020年から2030年のこの10年間で、子供にどんな力をつけなければいけないかということが中心に議論がされたんですけども、結論から言うと、そういう学識者においても、どういう社会になっているか、結果わからないという結論になりました。

例えば、いろんなこと言われますけど、10年、20年後には、49%の職業が機械に変わってしまう可能性があるという学者がいたり、あるいは、2011年にアメリカの小学校に入学した子供の65%は、今は存在してない職業につくだろうと予測されてると。本当にこの2030年というのは、先行き不透明でわかりにくい。でも、そこを確実に目の前の子供たちが2030年を社会人として歩いていくことになります。そうしたときに、やっぱり、その未来を生き抜いていくためには、学び続けるという力を身につけなければいけないと思います。

だから、正解のある、正解を今までは見つけることを主体に置いた学力。だから、よく言われるのは、ジグソーパズルがありますね。あれ、ピースを1枚1枚つないでいって、1枚の絵を完成させる。つまり1枚の答えがあるわけですが、その答をピースで知識をつないでいって1枚をつくるという、そういう学力から、これからはレゴブロックのように、つないでいって自分

で納得する、正解を見つけるんじゃないで納得する力をつけていかなければいけない、そういう時代であると言われていました。

そういう中で、丹波市の子供たちにどんな力をつけていったらいいんだろうか。やっぱり、自分が何をどのように学んでいったらいいのか、自分で主体的に考えて、未来を自分で創っていける子供にならないといけない。そういうふうに思います。そうすると、やっぱり自分たちの未来を創るというのを1つのキーワードにしたい、それが1つ。

もう一つは、先ほどから地域とのつながりとか、いろんな人の対話の中で子供は育つとか、委員のほうからいろいろ意見がありましたように、子供たちというのは、人と対話したり、コミュニケーションすることでいろんなことを学びます。子供はゼロ歳、おぎゃあと生まれたときに、まず家庭という社会の中で育ち、それが幼児教育の中でほかの子供と一緒に育つ。大人と育つ。そういうふうにして、どんどん社会との広がりを広げていきます。

そういう中で、郷土の育んできた伝統とか文化というものに立脚するということは非常に大切かなど。一番初め、赤文字で書いてますけども、地域に誇りを持って自分たちの未来をつくっていける。これは、戦略会議のときに言いましたけど、それは、丹波で起業して頑張ろうという力もあったり、あるいは、外へ飛び出して頑張って、ふるさと納税で貢献するでもいいんですけど、やはり自分の未来をつくっていける丹波っ子をつくっていきたい。

そうしたときに、はしょって悪いんですが、この絵の中の矢印の中にある、僕は、この3つの力が絶対要ると。先ほど言いましたが、学び続けるというのは、さっき読書のこともありましたけど、読書というのは一番手ごろで、1,000円か1,500円出せば、その人の頭の中を全部こう読みとって勉強することができる。非常に本を読む、これが学び続ける1つでしょうし、そういう力。

それから、新しい価値を創造する。いろんな情報が今ありますが、その情報を一つ一つパーツのように、レゴブロックのように組み立てていって自分なりの考えをつくっていく力。

それから、子育ての目的は自立ですので、最終的には、社会を自分の足で歩いてもらわなきゃいけないから、その力をつけていくというのは、この地

域に誇りを持ち、自分たちの未来をつくる丹波っ子につながるんだろうと。

だから、この3つを育むことで、私にもできる、私だからできるという夢や希望を持った子供をつくりたい。これが、きょうは時間の都合上、詳しくは言えませんが、私がこれから進めていきたい教育の大きな方向です。

そのためには、丹波人の現状、そういうどこに行くときに、今どこにいるかという話ですが、この下に、紺とピンク、ピンク、紺とこの4つの絵を書いていますけど、まず一つは、一人一人が互いの異なる背景を尊重して、違いを認め合う。

市長さんの資料にもありましたけど、金子みすずの、「みんなちがって、みんないい」というのが書かれてありますけど、いわゆる人として同じ重さでお互いを見るという、人権尊重に立つということが、何があってもベースになければならない。その上で、全ての子供が安心して、学校へ通える。

そして、先生が安心して働ける、これが次に出てくる、そうでなければならぬ。その上で、みんながそろって、そして働きやすい職場で、みんながこういうところで、確かな学力をまず基礎として保障してやると、同時に、学べる環境をきちっとしてやるということが、このいわゆる、ここの赤に目指していくための、まず下支えとなるところだと。これが下支えとして、共通になければならないと。これが一番の土台だと私は考えてます。この土台から、この赤に向かっていきたい。

細かいもろもろは省略しますが、そういう中で、市長のように、私もロードマップというのは、きちっと期限を決めるというのは、市長からずっと聞かされてますので、つくったのが2枚目と3枚目です。

どちらかというと、この1枚目のほうは、例えば学校課題、丹波市においては、先生方が非常に、働き方改革を求めて、非常に疲弊した労働されてる。そういうところの改善、先生の笑顔がないとだめだと思いますし、不登校率も非常に高い。学力もおおむね良好なところにはありますが、決して高いとは言えない。

ですから、先ほど言いましたように、下のベースとして、不登校がなくて、みんなが笑顔で学校に来られる。身につけなきゃいけない学力は、ちゃんと身につけているというところは、まずきちっとしてあげる上で、ソフト面と

して、コミュニティ・スクールという話が出ましたが、やはり地域とともにある学校をつくったり、私は、ICTと英語とキャリア教育をキーワードに、これは授業の中身です、授業の中身を変えていきたい。

そして、子供が安心して学べる居場所づくりと、先生が安心して働ける居場所をこうつくる。これはソフト面です。このソフト面をやっていきたい。

そのソフト面を支えるものとして、2枚目は割とハード面を書いています。

1番は、ピンクで書いている幼児教育・保育の充実ですけど、先ほど幼児教育のことは委員のほうから出ましたが、今度、認定こども園という、これは多分、丹波市だけだと思います。民間で、全てが認定こども園になる。幼児教育が物すごい特色であると同時に、2019年にスタートする。まさしく市長の言われる丹波市元年です。私らが言うところ幼児教育元年です。この幼児教育がひっくり返ると、小学校ひっくり返り、中学校がひっくり返ります。これはもう、今までの事実が物語っていますので、幼児教育というのは、きちっとやっていきたい。これは、私の、今、環境として、きちっとしなきゃいけないと思っています。いずれ、今度、幼児教育ができた、がわができたなら今度は中身ですので、幼児教育の専門の係を設置してでもやっていきたい。

それから、2つ目としては、トイレの洋式化とか、あるいは空調。やっぱり子供たちが学びやすい、そして安心してお便所にも行ける、我慢しなくてもいい環境をつくってあげる。空調設備することによって、夏休みとか冬休みの短縮というのも頭には入れてますけども、あるいは統合問題というように、やはりきちっと学べるハード面もしていきたいと考えてます。

その中で、30年度は、とりあえずは30年度、10の重要施策をしたいということで、この1番外国語、2番、グリーングリーンできてますけど、グリーングリーンは、前のページのグリーンに合ってますので、対応してますので、ICT、英語、キャリア教育等を活用した授業改革の中の、30年度は、1番2番ですよという見方になります。

こういう中で、確実に、ちゃんと期限を持って、ある程度の目安を持って進めていきたいと考えています。本当は、これをもう少し時間をかけて、説明をさせていただきたかったんですけど。

その中で、もう一つ冊子を用意してまして、市長のほうから、私の初めて



の予算というのは、教育長としての考えですということで、予算についてこんな思いをしておりますということを書いています。

これ優先順位を書いています。これは、平成30年度の10の施策について、各課に投げて、この10の施策をちゃんと展開していくために、どういう施策予算をつければよいか、考えてほしいとあって、この後ろに全部ついてますけど、両面刷りの後ろに10の施策体系の中で出てます。

その中で、1枚目、2枚目は、私が順位づけしたものです。先ほどありましたように、1つは認定こども園、これは、平成31年4月で、全てを開園させるというのは、政治的な決断という形でしていく必要があるだろう。

非常に難しい問題もたくさんあります。例えば、認定こども園柏原で言えば、あそこ御存じのように、柏原保育所のところに建てるんですけども、園を運営しながら増改築をしていくということで、仮園舎を建てたりしなきゃいけないんですが、今までは、園が建てられるように、市がしなければならないところは、ちゃんと準備をして、あとは建ててくださいねという渡し方を今まで過去からしてきました。柏原保育所についても、そこに書いてますけど、既存障害物の除去撤去費みたいなものは、市が負担してきた経緯があるので、今ちょっとここは、財政当局と実はもめておりまして、ここで詳しく話しするところではないんですが、認定こども園の開園に向けては、少々のあるけれども、市長、副市長の判断で、何とか4月開園に向けて、予算化をお願いしたいと考えてますことが、1点。そういうふうに並べています。

2番目、しろやまアフタースクールというのは、認定こども園、生郷が開園するに当たってアフタースクールする場所が、今のところ、東幼稚園と考えられてたんですけど、私、去年まで東幼稚園の園長してまして、水が流れると非常に怖いところで、物すごく滝のように水が流れてきます。あそこ急傾斜地になってるので。実は、私は、あそこを解体して、下に持っておりて新築したいと考えてます。

このあたりも幼児教育という、大体、がわたのことは、31年度で、もう全部片づけておきたい。31年4月以降は、ソフト面、幼児教育が、がわたができた後の何をどうする、この間も子育て支援でお母さん方がたくさん来られてましたけど、ここをどう充実するかというのは、丹波市のこれから先のキ

一を握っているような気がしてて、このあたりについて、また、予算期に、市長、副市長にちょっとお願いをしたいなと思うところです。

3番、4番は、これは、学校の洋式トイレも和式、先生の洋式トイレも含めてですけど、妊婦さんの場合は、なかなかしゃがんでというのはしんどい。子供さんもおうちでは洋式が非常に多い中で、洋式トイレをきちっと整備しておく、あるいは空調を考えてます。

その裏面に行きますが、その次は、これも市長にお願いしてはいますが、特別支援教育の充実ということで、個性のある、特性のある子供さんが非常に多いです。でも、その子も、ちょっと手をかけてあげれば、十分に伸びる可能性を持っています。それに対して、先生方、一生懸命奔走していただいているんですが、やはり一人で見られる数も人数も限られています。そういう中で、力いっぱいやってもらってる中で何とか人材投資をしていきたい。

それからもう一つは、保育士人材、保育園の人材です。実はこのまま行くと、丹波市も待機児童が出そうです。

保育士確保というのは、非常に、幼児教育の認定こども園とのセットで考えていかないと、認定こども園ができたけども、自分の目の前にある、言われるように、認定こども園に入れへん、あっち行けと言われると。入りたいところに入れへんというようなことで、そうなってくると、認定こども園って一体何だったんやと、原点回帰というか、そこに戻ってしまうとまずい。一生懸命いろいろと工夫をしているんですが、現実、なかなか保育士が確保できない。

このあたりにつきましても、また詳細をお願いすると思いますが、今言いましたように1、2、3、4、5、6というのは、子供たちの環境、それから、幼児教育の環境ということで、何とか次年度の予算をお願いして行って、基礎固めをして行って、ソフト面をやっていきたいと思っております。

それから、7、8、9、10につきましても、先ほども深田委員のほうからありましたけど、英語を軸にという言葉がありましたけど、私は英語というのは非常に大切で、だから、これから小学校3・4年生から英語活動が始まって、5・6年で教科英語になります。そういう中で、しゃべれる英語、コミュニケーションできる英語を目指していきたいということで、ALT、そ

れから英検の補助を書いています。

きょうは予算要求の場ではないのですが、こういうような1つの大きな目標に向かっていく。まず29年、30年は、基礎固めの環境づくりをやって、認定こども園の器ができたりしていく、学習指導要領全面実施になるころには、ソフト面にみんなが力を入れて、先生方の働き方改革も含めて、先生方がゆとりを持って、余裕を持って教育に当たれるようになればと。先ほども余裕という話が出てましたけども、そういう形で、子供も先生も、そして地域も、ウイン・ウイン・ウインになるような教育施策を展開していきたいと思っておりますので、ぜひ、できたら、ここに書いてあります観光拠点化であるとか、市民プラザとか、こういうものも教育にどんどん活用できればと考えておりますので、市の施策と教育施策ができるだけリンクしながら、一緒に地域も保護者も学校も育っていくような展開ができればと思っております。

ちょっと時間があれだったので早口になって申しわけないんですけど、この後の意見交流の中でお願いしたいと思います。

以上です。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは、意見交換に移らせていただきます。先ほど、市長、または各委員、教育長のほうからもございました件で、何かありましたら、どなたからでも結構ですので、お願いをしたいと思います。

○谷口市長 先ほど、岸田教育長から、予算要求の場ではないという話がありましたが、今この時期ですから、予算要求の話をせんと意味がない。何か教育委員会側としても、実利を取らないとあんまり意味がないのではないかという気はしますので、十分にそれは言ってもらったらいいと思っております。

私も予算要求、本当に予算をつくるって難しいですよ。予算の基本は、入るを量って出ざるを制すという言葉がありますが、何ぼお金が入ってくるのか、それを前提にして、その範囲内で歳出を決めていく。当たり前のことです。ないもんまで予算つけるわけにいかないのですね。

この前、財務部長が言っていましたけど、来年入ってくるお金は360億、それに対して出るお金が、各部局から、こんなことしたい、あんなことしたい、それが395億。結局、35億、要は10%ぐらいオーバーしていると。その中で、

単純に言うたら、10%分をどこに辛抱してもらうか、どこを切っていくかということですよ。

その中で、私は、庁舎が大切やと、こない言うてるんやけど、庁舎というのは、1つつくると50億とか60億とか、あるいは、場合によったら、それ以上の金がかかっていく。反対する人は、そんなもん金を使うよりも、もっと子供の将来を考えた、そっちのほうに投資すべきやないかと、そういうふうなことを言う人もあるわけです。

そういうことを、これから大変に悩まないかん時期なんでね。そういうこと原案は、副市長とか、そこにいる総務部長、あるいは財務部長がまず、原案をつくってくれましてね、私がふんと言うたら、それで済む。ただ、基本的には、原案というものにすごく引きずられるんです、やっぱり原案はね。よっぽど強い気持ちを持ってないとね。原案をぐるっと切りかえる、変えてしまうのはなかなか難しい。

その中で、話があっちゃこっちゃ行って申しわけないけど、先ほど配ったペーパーの中に、慎独の次ですね、自民党の2017年政策パンフレットがありまして、これ、選挙が終わったから配れるんですけど。自民党は、未来を担う子供たちに、保育・教育の無償化を実現しますと、こう言ってますね。

僕もようわからんまま、わからんままで大変失礼やけど、選挙に出るときに、3歳児、4歳児、5歳児は、無償化をやっぱり考えなあかんということ言ったがために、まごころ市長室では、あんた、無償化言うとったやろ、早うせんかいという話がありました。

ただ、去年も話ししてる中で、無償化するとどうい現象が起きるのか。やっぱり子供をどっと預ける人がふえてきて、結局、それは、保育士が確保できなかつたり、施設が足りなかつたりして、結局、待機児童を発生させてしまうという、そんな問題があるので、順番としては保育士の処遇改善で、保育士をきちんと確保する。その上で無償化なり何なりして、施設も整備をした上で子供さんを受け入れるということがないと、順番が逆になってしまうと大変なことになる。

例えば、明石市が、今2人目以降は全く無償ということ言ったがために、待機児童がすごくふえてしまっているという現状があつたりして。そういう

こととのバランスも一緒に、待機児童が出て不公平が出てこないようなことも考えないといけないということもあるなど。

ただ、国は、このようにして、無償化と言ってるので、言った以上は多分するんでしょう、それ。まずは5歳児からということになるのか、ちょっとわかりませんが。

そのように、予算をつけていくときには、大変に難しい問題があるわけです。単に、今言うたように、歳入って言うたら360億しかないんかと言うたら必ずしもそうではなくて、借金さえすればいいんです。先々、借金、支払いを延べ払いに、将来の人に負担を求めることにすれば歳入の確保はできるんですけどね。そこのところは難しく、そうすると、財政状況は、5年先、10年先、20年先どうなっていくんかということ、きちんと市民の皆さん方にわかるように説明していく必要が、それは重要やなどは思っているところです。

岸田教育長からいろんな提案がありました。今、こういったものについては、私も可能な限り、真剣に前向きに考えていきたいなと思うんですが、先ほど言いました、全体で。例えば、病院が2年後にオープンするんですけど、病院関連の支出も相当大きいです、病院関連もね。高齢者福祉とか、どうしても削れないものがあったり、その中で、どっちが大事やねんという、そういう厳しい選択に、究極の選択というのはありましたけど、そういう時期を迎えることになります。そこは十分に議論していきたいと思っています。

○岸田教育長 認定こども園を進める中で、僕らが直面してきたのは、迷惑施設やということをはっきり言われるんです。学校がなくなるとさみしい、地域が滅びると言われる割に、認定こども園を持っていきますでしょう。防音壁をつくれだとか、水を流すとか、うるさいとか。

僕は、丹波市の1つの一面を見たような気がして、やはり、これから担ってくれる子供たちを育てる、それはみんなが育てる、当事者意識を持つとか、みんなで地域をつくる。だからシティプロモーションを含めて、やっぱり僕は、大事なものは、市民がそのつもりになって丹波市をつくる、丹波市の教育を担うという、そういう、もっと文化意識を高く持たないと。今何か言ったら、この間の子育てでもいいこと言うてんですが、最後は要求なんですね。

要求団体みたいな。何してくれ、これしてくれ、あれを残せと言う。だから、もし、例えば子育て学習センターがなくなったとしたら、私らこれしますよという、私らができることはこんなことがありますよというような、そういうマンパワーをこう引き出していけるようなことをしないと、コミュニティ・スクールをしても、同じことになってしまうんですね。

学校が言うさかいするけど、こんなこと、そもそも嫌なんじゃと言う人もあるんですよ。教育のことは、我らわからへんという話。ところが、統合問題でいくと、おいおい何言うトンじゃと、小さいほうがええんやないかということは言うてんですよ。

そのあたりが、やっぱりお互いが同じ方向を向いていくというのがものすごく難しいし、例えば、認定こども園を1つ、平成18年から旗印として挙げていけた以上は、例えば1つの軸ぶらさんと、幼児教育に、ばあっと向かっていくという基本軸持っとかないと、何かこう、ぶれていくような気がしないでもない。

その中に、市長のシティプロモーションの中にちゃんと教育もあると、子供たちがいるというような、そういう仕掛けを僕はつくっていきたいと思っているんですけど、どうですかね。

何か僕は、よく地域の人、保護者の人の考え方が、よくわからないときがあるんですけど。

○荻野教育委員 今回の件ですけど、私は、学校協議会、コミュニティ・スクールは、丹波市やからできるのではないかと、この地域気質というんですかね、やっぱりこれまでマスコミなり、そういうところで出てくることって、かなり、保育園が、子供の声がうるさいとかということで認可されないとかというケースが非常に多いですけどね。

丹波市の中で、そういう声よりも、はるかに子供たちがこの地域で育っている、その育ちを応援したいと言う思いは、丹波人、結構多く持っているだろうと思うんです。そういう意味で、そういうような、子供関連施設にしても、やっぱり早くきちっと市民には説明をしながら設置をしていくということが私は大事ではないかなと。結構、大人は子供に対して、私は、そういう寛容やし、育ててほしいという基本的な思いを、皆、持っているのではない

かと思います。

○谷口市長 さっきも、深田委員と、それから荻野委員からも廃校活用の話が出ましたが、私も去年、まだこういう立場になる前ですけども、市役所の中も、あるいは地元に向けても、こんな使い方したいという意見は一切出てこない、そんな状態がずっと続いてましたよね。それやったら、早う民間に、全国公募でもしてすべきやと、利用方法を。そんな話を辻前市長あるいは小田前教育長にした覚えがあるんです。

その中で、今、自然体験施設とかいう話もありました。それやったら教育委員会で、もう少し強力にこんなふうに使いたいんやという話が、当時から出てきてもよかったんやと思うんですけども、それは財政部局が強くて、そこでぎゅっと抑え込まれてしまったんかなとは思うんですよね。

今も民間企業が来ましたが、今からでも、これ、ねじ込んでいくことは、可能性としてないわけでもないのですが、ただ、最終的にどうなるかは、よう保証はしませんが、ちょっとそんなことも考えたらどうかと思うのと。

私も民間企業の人に来て、これから、じゃあ、こんなことやりませという話をするんですが、地元から相当反対の声が今上がってきています。

例えば芦田小学校なんかは、ドローンとかロケットとか、そんなものを活用するなんて、そんなもん論外やと。今さら何やねんと言いたいんですけどね。そこはね、決まっちゃったん違うのんと言うんですけども、はっきり言うたら、反対する人の声の大きいですよ。賛成する人は、何にも言うてやない。サイレントマジョリティとかいう言葉ありますけど。ただ、表に出てくる声は、もう反対ばかり出てくるので、何や、この地域は反対かいと思うぐらい、強烈な厳しい言葉で返ってくる。私も、これではあかんと思って、先週、地域に行きましたけどね。同じように言われる。

そういったところでも、やっぱり長い目で、この地域を支えていかないと、これが全く取り潰してしまうということになると、地域の灯が消えてしまいますのでね。最後の砦として全国公募で選んだわけですから。そこまで言うんやったら、もう逃げるかもしれませんよと言うて、これから、また説得に努めたいと思ってます。

そういったところに空き教室が十分あるわけですから、地元の子供さんを

地域とつなぐための利用方法というのも、もっと今からいろんな提案があってもええん違うかと思えますよ。

ドローンの会社が、あの広い校舎とか体育館、全部使うはずがないですわね。せやから、もっと競い合うようにして、それやったら、もっとこんなことも、あんなこともというのを、いいものが出てくりゃ、地域と市役所もなんぼか負担し合いながら、まだ方法あるなと思っています。

本を読まないという話ね、岸名先生、ずっと言われるよね。岸名先生よう御存じですかね。おっしゃることは、正しいんやと思うんや。多分、ああいふうに思考力をつけるためには絶対必要ですね、それ。具体的には、どうしたらええんかな。図書館司書を置いたら、それでええんかという。多分、そういう予算要求が出てくると思うんですけどね。

○上田教育委員 きょう、読書の話がとても多かったので、私が見てきた海士町の事例ですけど、おもしろかったのが、ちっちゃな島でちっちゃな図書館しかないんですけど、いろいろ工夫をされていて、その町の図書館の司書さんが半日学校に行くという仕組みをとっていて、そこで半日間は、子供たちのための仕事をするという仕組みをとっていたり、あとは、図書館自体も飲み物オーケーにしてるんです。それって、考えてみれば別に大したことじゃなくて、なぜって、借りて帰ったら、みんなコーヒーを飲みながら、本を読んでもらうと思うんですけど、なぜか、図書館っていう空間では、それが許されてなかったりして、その辺を柔軟に考えることで、ちっちゃい町のちっちゃい図書館ですけど、人が集いやすい。純粹に、すごい本好きな人じゃなくても来るといいう仕組みがとれていて、そういうのは、すごくおもしろいなと思いました。

それで、市民プラザ、市民活動支援拠点の話にもなるかなと思うんですけど、やはり、そちらはそちらで検討していると、図書館の持つてる機能というのを置き去りにしたまま、宙に浮いたような形になってしまうので、何らかの形で、建物自体を絶対一緒にしなきゃいけないということではないんですけど、人の交流とか、あとは、やり方の工夫で、図書館機能を一部持たせるなりして、そういう読書、図書ということも生かした生涯学習市民活動支援というのができればいいのかなと思います。



○谷口市長 何か明石市長が、トリプルスリーって提案してはるんやけど、一つは人口30万人、生まれてくる赤ちゃんが1年間3,000人、本の貸し出し件数が300万件とか何とか言うて、それをすごく掲げられてます。あそこは、駅前に大きな図書館できるんかな、明石市は、確かにね。そやから、なかなか斬新なおもしろい取り組みやなど。子供は盛んにゲームにほうけてるので、そのことに一石を投じるための施策ではないかと思ったんで。

廃校跡地の活用として、そういうことも考えられへんかなと思ったりしないではないですけどね。そういうことは、教育委員会から提案が出てこないと、多分誰も言わないと思う。

○深田教育長職務代理 今、読書の話になっとるんですが、子供たちの取り巻く、本を中心とする、その図書館とかの環境。丹波市で、実態は実際どうなってるのかということですが、学校の中では、図書室あるんですが、御存じかと思うんですが、もう色があせて、茶色くなった、10年ほど前に買ったような、そういう冊子が多いです。

それと、町へ借りに行くと、町はこうやって6つに分散してますので、そんなに蔵書も多くない。中央図書館は少しはあります。図書館の環境も、借りに行くと、その棚の周りは机が並んどるんですが、机は全部、高校生が占拠して、高校生が受験勉強しとると。それもさっきお話があったように、中には缶コーヒーを飲みながらやってるのもおるといふ。

今の状況の中ではちょっとまずい状況もあるんですが、読書をする環境が少し、冊子の古さも含めて、ちょっとまずいなと感じているところです。図書館の施設も、じっくりと本を借りたり、読めたりするような環境でもないというところがありますので。

これは誰が悪いか、それぞれの場所で考えていただいたらいいんですが。

その中で、少しでもよくしようということで、今、図書館司書の話、例えばの話が出たんですが、予算をつけて雇い入れるというよりは、先ほどボランティアの話が出てましたが、地域にボランティアで図書を整理してもらったり、子供って今、何を学ぶために、どういう本が必要かというのを、それをやっぱり地域に求めていくとかいうことがあってもええんかな。いろんな地域でやっておりますので、具体にも。それをやりながら、それでも、なお

かつ、足りなければ次の段階を考えるというような。

ちょっとまとまった話、できないんですが、今、それを整理する段階、読書をする環境の整理する段階に今あるのかなと思われま。

市長がおっしゃったように、それを具体的に予算をつけるとかいうのは、もう少し先かなと。ただ、本はたくさんほしいですけども、そんな感じします。

○**鬼頭副市長** 先ほど上田委員から、市民活動支援センターの話の中で、どうも地域と学校の関係とか、あるいは生涯学習のこととか、子供のこととかいうのは、少し置き去りになっているという。確かにおっしゃるとおりで。今、市民活動課が教育委員会から社会教育生涯学習補助執行で、あそこがやっているとすることで、若干、その地域と学校との関係とか、子供という視点がやっぱり薄いのは確かで、あんまり議論にこれまで出てきてないというのは確かです。

どっちかというとも市民活動とか地域づくり活動が主であって、今、おっしゃるような視点をですね、やはり、これからいよいよ、今、学びの里づくり協議会で、これまでずっと上田委員も入っていただいて、議論をしていただいているんで、その部分を懇話会に移していきますけど、議論。今おっしゃっていただいたようなことは、きっちりをつないでいって、その地域づくり活動とか市民活動の中に、子供をどう巻き込むかとか、学校をどう位置付けるかとか、それこそ図書の話も含めて、少しつないでいくようにはいたします。

○**上田教育委員** やはり、丹波市が、この後、元気に活力ある町として続いていくためには、子供とか次世代というのは重要だと思うので、なかなか、恐らく市民にとっても、行政の中においても、子供のことは教育委員会でしょうとか、学校でしようというところが、どうしても無意識に。それは就学前でも一緒だと思います。こども園に預けたらもうそれでいいのかなっていうのとかあると思うので、一朝一夕には、それが変わるというか、変えていけるわけではないかもしれないですけど、その担い手になり得る人がふえていくとつながっていく。

実はいないわけ、さっきのサイレントマジョリティじゃないですけど、実

は、静かにしてる人の中に、本当は力をかしたいなっていう人もいたりすると思うので、そこは、あきらめずにつないでいくことは大事なのかなと思います。なかなか、すぐに成果があらわれるものではないかなと思うんですけど、やはり、この後のことを考えていけば、そこが重視されたら、私自身はうれしいなと思います。

○谷口市長 きょうも話し合いの中で、幾つか予算をつくっていく上でのヒントになることがあったと思います。それは、ずっと重く受けとめて、これから検討していきたいと思います。

○村上部長 ほかの委員、特にございませんか。

それでは、ないようでございますので、その他のほうに移らせていただきます。

教育委員会のほうから特にございませんでしょうか。

それでは、大変申しわけございません、定刻4時半になりました。時間設定がまずくて、もう少し意見交換の時間もとれるように、次回からは配慮していきたいと思っておるところでございます。

それでは、以上をもちまして、第2回の総合教育会議のほうを終了させていただきます。本日は、ありがとうございました。